

現代版「観察いろいろ」

浜口順子
上坂元絵里
菊地知子
私市和子

かつて「観察」は保育項目だった

浜口 約八十年前の『幼児の教育』に、倉橋惣三による、子どもが観察をすることの意義を母親と語りあう場面を想定した問答録が載っています（この後の14〜17ページに転載）。現在の保育内容は「健康・人間関係・環境・言葉・表現」の5領域ですが、当時は「遊戯・唱歌・観察・談話・手技等」の5項目で、「観察」は保育項目の一つでした。

上坂元 確かに、今、「観察」という言葉を聞

いて、まず思い浮かぶのは、保育者や研究者が子どもを観察する「保育観察」だったり、理科の授業の「観察」だったりします。

菊地 その5項目というのには、たぶん、「実物」とか「実際」という、古い難しい字で表す「實」ということが共通にあるのだなあと思いました。幼い子どもにとっての「見る」ということは、空虚だったり概念的だったり観念的だったりすることではなく、実際の物、実物を、実際に、身を通して体感してみることなのだということを、たぶんここで倉橋は言いたいのでしょう。「知識なんか教へはしません」とか「もの知りなんかにするのぢやなくて」とも言っていますし。

私たちのナーサリーにいる子どもは〇〜二歳なので、もちろん、「さあ観察しましょう」などとは言いませんし、子どもたちも「観察するぞ」などとは思っていません。それでもよく見ているなあという場面はたくさんあ

浜口順子（お茶の水女子大学教授）

菊地知子（お茶の水女子大学附属いずみナーサリー主任保育士）

上坂元絵里（お茶の水女子大学附属幼稚園副園長）

私市和子（文京区立お茶の水女子大学こども園施設長）

ります。

乳幼児の場合、「見る」というのと、その見る対象に「なる」というのがすごく近い場合が多いと感じます。例えば、チョウを見たり、電車を見たりするときに、見ている対象であるはずのものに「なっちゃってる」みたいなところがあるかなと思います。小さな電車を目の前で走らせているときも、対象物として電車を見ているというより、明らかに「乗って」いますよね。

上坂元 幼稚園でも、「見る」ということ、子どもが何を見て、何に気づき、何を感じているのかということは、とても大事に考えています。

私市 この親とのやりとりを読んでいると、乳幼児教育の一番大事なことがここに書かれていると思います。

浜口 どんなことですか？

私市 母親が「幼稚園ってというのは何か教え

てもらったところだ」って思い込んでいる。今の時代でもあるのでは……。

上坂元 保護者のそうした期待は感じますね。

私市 こども園の入園見学に来られる保護者の方から、「何か教えてくださるのですか」と尋ねられたりします。

上坂元 保育の中の教育、「教える」ということをどう捉えるかは深い課題です。倉橋が、知識を教え込むというのは「いけません」とお母さんにきっぱり言っていて、どきつとさせられました。教師は、子ども主体の生活と言いながらも、やっぱり教えたがりなところがあります。自分の知っていることを伝えながらところに、倉橋先生がユーモアを含めながら警鐘を鳴らしていると感じました。

「観察」する面白さと喜び

菊地 ナーサリーでは、ここ三年連続で、大

学の中庭で見つけた卵がおおむしになりチョコ



ウに羽化するまでを見届けるという経験をしています。葉っぱの裏についた卵を葉っぱごとナーサリーまで持ち帰り、毎日毎日「今日はどうしてるかね」って見るんです。『はらぺこあおむし』を読んで、ちようちよになるかなあ、と言いつたり……。観察しているというのとも、育てるのとも違って、その卵を気にしたり気遣ったりしながら一緒に育っているとか、そんな感じなんです。それでいよいよ羽化して、テラスから飛んでいくのを見て、「元気でねー」「またねー」と見送る。

いわゆる「見る」というよりも、そういう、時間の経過も空間の移動もあるような、身をもって生きる経験をしています。

上坂元 幼稚園でも、

五歳児が親子で「夜のようちえん」でセミの羽化を見る会を、三年前から設けています。自然の不思議や美しさを親子一緒に見る体験は、本当に感動的です。

私市 こども園では、親子ワクワクデーを年間六回、土曜日に開催しています。参加希望の親子が集って一緒に遊ぶ会です。1号認定（幼稚園枠）の保護者の方と2号・3号認定（保育所枠）の保護者の方の出会いの場をつくる、という意味合いもあります。

第一回は〈ダンゴムシと遊ぼう〉。第二回は〈大学内の虫を探そう〉、この会にはゲストで日本昆虫協会の方をお呼びしました。親子で虫捕り網や虫かごを持って集いましたが、お父さんやお母さんが夢中になって虫を追いかけて、「見つけたぞ、〇〇虫!」。そんな親の姿を子どもが見る経験は貴重でした。名前を知らない虫は昆虫協会の方が教えてくださいました。

これは園の散歩とは少し違います。保育者と子どもで「これ何だろう」とじっと見て、わからないと、その姿から「とげとげ虫」になり、後で調べるようです。一歳児も虫に興味があります。セミを「ミンミンないてる」と言って、抜け殻を探し始め、保育者が手の上に載せるとじっと見て、加減がわからず握りつぶしてしまう。そのうち、壁についている抜け殻を自分で取れるようになり、そうすると、つぶさないように大事に持っています。季節が変わり、セミの鳴き声がしないと、「ミンミンいない」と気づきます。乳児は見るだけではなく、耳を澄ませる。「聞く」から始まることもあると思います。

菊地 普段子ども園で遊ぶ中で捕まえる虫と、保護者と一緒に見つけた虫と、同じ種類だったとしても、その状況や一緒にいる人によって違うものになっているのかもしれない。観察というのは、実際に視覚的に見えること

から捉えるだけでなく、むしろ、目には見えないかわり合いなんかもすごく関係していて、生き生きとした「実」、実際に捉えるものっていうことなのでしようかね。

物の世界を本当に「知る」

上坂元 幼稚園でも、じっと見る子どもものまなざしを大事に捉え、園内研究会で話しあってきています。以前、五歳児が園庭でダンゴムシとワラジムシをたくさん見つけて、じっと見たり触ったり、友達と話す中で、その二つの違いにいろいろ気づいて、結果としては図鑑みたいなものができたことがあります。一人ひとりの子どもたちが知っていく過程は





それぞれに違うけれど、よく見て、気づいて、分類する面白さまで感じていました。「ダンゴムシとワラジムシはここが違うのよ」と教えちゃってしまっていたら、こういう体験につながりなかったでしょう。

倉橋による問答録でも、貝に自分で名前をつけていますね。最初に名前をつけた人も、この子どものように感じて考えて、まる貝、なが貝って、こういうふうにつけたのでしょうね。

二十年以上前ですが、精神科医のなだいなだ先生が園で保護者向けに話をしてくださって、お母さんたちに、「与えることは奪うこと」とおっしゃったそうです。例えば、おもちゃを

たくさん与えると、一つを得る喜びを味わえなくなるというような話があり、印象に残っています。

菊地 これは蛇足かもしれませんが、『星の子さま』の中にも、大人が、例えばこんな素敵なおうちだったよっていうことをいくら聞いてもその価値がわからなくて、何フランの家だって言うよと、ああって納得する話が出てきますよね。今、聞いていて思ったのですけれど、「わかった」とか「知っている」っていうことが真に意味するところは、「どのくらい金銭的価値のある家なんだ」というような知り方、わかり方とは全然違うものなのではないでしょうか。気持ちが本当に動いて心が動いたら、子どもは体も動く。ですから、本当の観察っていうのは、そういう、本当に心が動き体が動くようなわかり方、理解の仕方につながっていくような経験なのかもしれない、と思います。

上坂元 この最後のところにも書いてありますよね。「知識そのものを沢山与へられて持つてゐるといふのでなく、自ら実物から知識をつくり出してゆく心の第一の働きを強くするのはですよ」というのが、私たち保育者が心に留めておきたいことだと思います。

浜口 観察することの意味は、物の世界と人がどういうふうにつき合っていくかというところに中心が置かれているような気がしてきました。外から与えられた知識と、本当に自分自身で味わったものとの間で、物の価値のバランスを学んでいくために、観察って大事なんではないかね。

保育者が支える観察

私市 ○歳は知識ではなく自ら能動的に動いて知るということでしょうか。こども園の○歳児の室内に仕掛けがあり、床に（緩衝材の）プチプチシートを貼ってあります。いくつか

赤い印をマジックで付けると、一歳半になった子が来て、まずは赤いところに触れる。保育者がつぶすとプチプチといい音がして驚き、もつとやって！ という表情をします。そのうち、自分の指でもやりたい！ に変わります。一緒に手を添え、音が出ると、次第に力加減がわかってきて、すでにつぶれた物とまだ押せる物を指で感じるようになる。目の前の子の子どもが何をしたいのか理解して丁寧にかかわっていくと、後は子ども自身が学んでいくように思います。

浜口 プチプチをつぶせるんですね、一歳で。

私市 はい。繰り返して遊んでいっているうちに、押せるようになってきます。

上坂元 すごい達成感だったでしょうね。





浜口 すごい。

私市 すごいでしょ。私もそう思う。そこに寄り添っていたその保育者も素敵だなあって。

子どもの指先をちゃんと見てる。見てるっていうか一緒にやってあげるっていうところが。

上坂元 先ほど私市先生が言われた「目の前のこの子どもが何をしたいのか理解して」というのは、保育者自身もよく見ていないと気づけない、理解できないと思うんですね。

浜口 今日は、乳児さん中心のナーサリー、

そして、幼稚園、
 こども園の先生方が一緒なので、年齢や発達による観察の仕方の違いも話題になるかしらと思いましたが、むしろ、子どもが自分で体で感じて、

物の世界を自分の中に取り入れるようにつかんでいくことでは一貫しているという話に…。

上坂元 エピソードを伺っていると、子どもは〇歳からものすごく力があり、保育者は、子どものじつと見るまなざしや、表現していることに、感動しながら寄り添っている。年齢が上がるにつれ、子どもがじっくりと見ることを保障するために、気をつけなくてはいけないことがあるように私は感じます。倉橋先生は、そこにも危惧を感じていたのでは。子どもが実際に感じ取って気づいていくその経験が大人が奪ってしまうということが起き得るということを、倉橋先生は「教へられた」けのことだから、さつさと忘れて。」と書かれています。自分で「え！」とか「あー」とか思ったことって、「あの瞬間、私は目覚めた！」といった記憶が残る気がするんですね。

子どもの気づきに寄り添う

菊地 確かに〇歳の人たちって、しょっちゅう「おっ？」ってなってますよね。なんていうか、「おっ？」って気づくというか、驚く。なんかそれが面白いというか、「ふふん、知ってる」って感じではなくて、「おっ？」ってして、「どれどれ」っていうところがあって、「どれどれ、ふむふむ」っていうところまであるというのが、面白いですよ。これが、子どもの「わかり方」なのかもしれない。たぶん博学とは正反対のあり方で。

上坂元 そうだと思います。四、五歳になっても、そういうときは言葉ではなく、一瞬間まるような感じがある。子どもがじっと見る姿を大切に、向きあうというより横並びで、何をどう感じているのかに寄り添いたいですね。例えば入園当初の春、しゃがんで、子どもと同じ目の高さでアリやダンゴムシを見る

ことで、ほっとしたり、子どもとの距離が近づくように感じる場合があります。何かに気づいて「おっ」っていう場面に出会えたときに保育って楽しいじゃないですか。

私市 幼児組の子どもたちは、給食の食材をよく見えています。配膳の準備をしているときから、「いつものみかんと違う」と、みかんの種類が違うことに気がつきました。「どこが違うの？」と尋ねたら、「ほら見て。へたのところ、しわがあるでしょ」って。へたのところ盛りが違ってしわのようになっていのですね。「皮だっけいつもと違う」と数人で話をしていました。

浜口 何歳のクラスですか？

私市 それは四歳です。栄養士は幼児組と一緒に食事をするので、子どもたちが「これは何？」と聞きに行くわけです。「これ、ポカン。いつものと違うよ」って伝える。「へえ〜」「やっぱり」と言って、「皮もむきや

すかった」「食べたら種があった」などと話
していました。それでみんなで自分の種がい
くつあったとか、種の観察も始まります。そ
ういうことがうれしくて、栄養士がいろいろ
な種類のみかんを出すようになりました。
浜口 四歳ぐらいになるとやっぱりそういう
ことをいろいろ感じた後に「これ何？」と聞
きたくなって、ポンカンという名前が体に響
くんじやないでしょうか。

私市 そうですね。

上坂元 味や香りを体で感じ、味わった後で
知る名前は、実感を伴って心に残るのでしょ
うね。

浜口 「これがポンカンですよ」といきなり
教えてしまうのは残念な「教育」です。名前
や概念がしみじみと体に浸透しないで、干か
らびた知識になってしまう。

私市 食べ物は身近な物なので興味がありま
すね。畑でブロッコリーを収穫したときに、

保育室でゆでました。ゆでたお湯の色が変化
して「色が変わった!」。そこまで家でなか
なか見てないのでしょう。しかも味が違う、匂
いも違う。「食べ物に興味や関心があると、食
べる喜びにつながる」と栄養士と話していま
す。

上坂元 ほんとに実物ですものね。

一同 実物。

浜口 しかも食べるっていうね。

上坂元 しかもあのブロッコリーがね、あんな
おっつきい葉っぱの中にあんなふう存在す
るってことなんて、ものすごく面白い。

私市 残念ながら、葉っぱは鳥に食べられて
たんですって。周りの葉っぱがなかったって、
子どもが残念がっていました。

(二〇一七年二月十四日)